

# 原発〇ゼロにむかって

2012年4月26日 No.18

<http://www.tokyominiren.gr.jp/>

編集・発行／東京民医連事務局 tel : 03-5978-2741 fax : 03-5978-2865 mail : sien@tokyominiren.gr.jp

## 福島連帯／現地視察 「福島の実態を知ってほしい」 福島の各分野から深刻な実態を学ぶ

4月14、15日に「福島連帯／現地支援」を実施し、共同組織6人を含む39人が参加しました。はじめに訪れた福島農民連「産直カフェ」では、赤間初江店長から「東京から来てくれることをずっと楽しみにしていました」と歓迎の挨拶がありました。福島は内部被曝の不安が強いため、福島産の野菜だけを売るのは店が成り立たず、奈良県を中心とした全国の産直野菜や果物が並んでいることに驚かされました。穴原温泉「吉川屋」のコンベンションホールでの交流会には佐藤晃子（福島県労連女性部）、根本敬（福島県農民連事務局長）、松本純（福島県民医連会長）、佐藤八郎（飯館村村議）の皆さんから現地の実情が語られました。3人のお母さんである佐藤晃子さんからは「福島市のわたり



防護服姿の人たちが出入りする、楢葉町、Jヴィレッジの20Km検問所。

地域は小学校が1クラス分少なくなり、保育園は全て定員割れで、あらためて本当にここにいていいのか、不安が突き付けられている。子どもたちは、夏はマスク、長袖、長ズボンで、その上教室の窓も閉め切られ、扇風機の熱風にプリントを押えながら勉強した。遠足や運動会は中止され、凶工の時間は教室の窓越しの風景を写生した。転校は、生徒が動揺するため挨拶なしで、

机が空席になって初めて分かる。こんな状況で、この地に踏み止まれるのか、悩みながら子育てをしている」と涙ながらに話されました。佐藤八郎飯館村村議からは「飯館村はもともと一家で月15万円以上の収入があることはあまりなく、一人月10万円の慰謝料は金銭感覚を麻痺させ、労働意欲も含めて人間としての復興が難しくなっている、若者は村に戻りたがらず将来の村の存続も危ぶまれている」と訴えました。2日目は、伊東達也（浜通り医療生協理事長）、畑中太子（広野町町議）の案内で楢葉町の20Km検問所、事故収束の作業拠点となっているニッ沼総合公園、広野町やいわき市の瓦礫置き場などを視察しました。

2日間を通じて、現地の方々からは、低線量被曝への考え方、子育てへの考え方、慰謝料の有無など住民が分断されるもと、大きなストレスを感じながら福島の復興にむけて踏ん張っているが、大飯原発の再稼働の動向など「本当に福島の実態をわかっているのか」という憤りと孤立感が深くあり、「沖縄の人たちの気持ちを始めて理解したような気がする」というメッセージもありました。視察に参加した「原発ゼロ八王子の会」、「代々木健康友の会」はすでに現地応援交流ツアーを企画し、健友会も計画立案を開始するなど、福島への共感を深める現地交流が始動しています。



津波被害のあと瓦礫置き場となっている、いわき市立豊間中学校